

ポローニア

paulownia



絵：畠山雄也（筑波大学附属桐が丘特別支援学校卒業生）

目次

| | | | |
|---|---|---|---|
| 教育長挨拶 ポローニア巻頭言 ◆石隈利紀…………… | 2 | あ〜とでコラボ 〜表現することつながる〜 ◆高橋幸子…………… | 5 |
| 附属小学校 日米児童交流会 ◆細水保宏/荒井和枝…………… | 2 | 筑駒アカデメイア公開講座 〜小学生からお年寄りまで 楽しい学びの一日〜 ◆濱本悟志…………… | 6 |
| 日中関係の将来を模索した 第4回「日中高校生交流」◆鎌倉芳信…………… | 3 | 春期研修会 ◆熊谷恵子…………… | 7 |
| アメリカからの講師招聘による TEACCH自閉症研修会(報告) ◆雷坂浩之…………… | 3 | 附属学校研究発表会 ◆菅野和恵…………… | 7 |
| 筑坂生になる第一歩 ーコミュニケーション・キャンプIN黒姫ー ◆塗田佳枝…………… | 4 | 平成25年度附属学校研究発表会日程表…………… | 7 |
| 専攻科造形芸術科 平成24年度卒展 ◆橋本時浩…………… | 4 | 「科学の芽」賞募集要項…………… | 8 |



ポローニア巻頭言

附属学校教育局 教育長 石隈利紀



ISHIKUMA
TOSHINORI

はじめまして。4月1日から、筑波大学附属学校教育局教育長を拝命しました石隈利紀（いしくま としのり）と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。私は、附属11校約4300名の子ども、600名の教職員のみなさまの学校生活を守る責任を感じて、身の引き締まる思いです。

さて筑波大学は、永田恭介学長の下、新しい執行部で新年度が始まりました。永田学長は、所信表明で、我が国最初の高等教育機関として創立された師範学校以来、筑波大学に根ざす人材マインドは「師魂理才」であることを強調されました。師魂理才とは、親も先生のように人に接する心や人々をまとめる力を持ち、かつ合理的な問題解決の才能をもつことを意味します。私は師魂理才こそ、まさに附属学校が受け継いできたものであると思い意を強くしております。

そして筑波大学のミッションとして、永田学長は二つあげられました。

①地球規模課題の解決と未来地球社会の創造に向けた知を創出する（研究）

②それを牽引するグローバル人材を育成する（教育）

さらに、「師魂理才や地球規模課題への問題意識は初等・中等教育の段階から育むべきもの」として、附属学校は「我が国の初等・中等教育の未来を思い、ともに冒険や挑戦を企てる仲間」と言われています。

ここに、私は筑波大学附属学校が大切にすることを3つ示したいと思います。

①子どもの安全で健全な学校生活を守る。

②教職員の働きがいのある職場をつくる。

③筑波大学の一員として、筑波大学のミッションの実現に貢献する。

附属学校は、子どもを大切に、教職員互いを尊重し、筑波大学と協働していきます。子どもの未来と社会の未来を思いながら、ともに進みましょう。

附属小学校 日米児童交流会

筑波大学附属小学校 副校長 細水保宏
英語教諭 荒井和枝

附属小学校では、スタンフォード大学や現地公立及び私立学校の協力を得て、3月24日から30日まで4年生の代表24名とその保護者、学校から6名の教員が参加したサンフランシスコ日米児童交流会を実施しました。

語学体験だけでなく、異文化理解を深め、積極的にコミュニケーションを取ろうとする子ども、また国際的な視野を持ちグローバル社会に対応したこどもの育成を目指して、小学校段階での海外交流プログラムです。

現地校のボンデローサ小学校での1日目は本校の田中教諭が算数の授業を英語で行い、日米の子どもたちが算数のゲームで交流しました。事前にゲームの仕方を英語で説明する練習をして臨んだ子どもたちは徐々に相手と打ち解け活発に活動できました。また、現地の先生による体育の授業にも参加しました。2日目は日本語や習字、けん玉などの日本文化を紹介する時間を設けました。現地の子どもたちも興味津々で英語で話し合うよい経験となりました。

スタンフォード大学では、まず英語で自作した名刺を学生さんと交換する名刺交換

会を行いました。何度も自己紹介を繰り返すことで自信がついたようです。その後はグループに分かれてキャンパスツアー体験。大学のスケールの大きさに教員共々驚くばかり。また、日米の両面を知っているスタンフォード大学村田教授（現バークレー大学）からは異文化理解やカルチャーショックについてディスカッション形式の授業を受けました。

ヌエバ小学校では、授業だけでなくランチ体験もでき、日米の子どもたちが仲良く充実した時間を過ごしました。

今回の交流会は、子どもたちに成就感や英語に対する意識の高まりが見られ非常に有意義なものとなっただけでなく、教員も視野が広がり成長することができ、今後の大きな可能性を感じた試みとなりました。



日中関係の将来を模索した 第4回「日中高校生交流」

附属高等学校 教諭 鎌倉 芳信



日本大使館で堀之内臨時大使夫妻とともに

「日中高校生交流」は2012年に4回目となりました。この交流は、イオン1%クラブの社会貢献事業として全面的な支援を受け、第1回は筑波大附属高校が単独で、2回、3回は、学芸大附属高校

を加え2校で行われました。そして今回、2012年が日中国交正常化40周年に当たることから、当時の駐中日本大使丹羽宇一郎氏の要請もあって、日中双方で100名ずつ、計200名の規模で行われました。日本側は、お茶の水女子大附属高校、都立西高校を新たに加えて4校で行いました。筑波大附属高校からは男女合わせて35名の生徒が参加しました。

7月に北京市、天津市、青島市の10校の高校生が来日し、8日間の滞在中、各学校での交流の他、首相官邸訪問、中国大使館での歓迎会、ホームステイ等を体験しました。特に今回は両国の代表生徒24名が、これからの日中両国の関係について私たちにできること、と題して英語でのディスカッションを行い、「日中高校生未来宣言」をまとめました。

日本からは当初10月訪中の予定でしたが、9月に尖閣諸島問題が持ち上がりました。中国側生徒や学校からはぜひ予定通り来てほしいとの希望が寄せられましたが、この問題のために訪中は延期せざるを得なくなりました。そして、12月19日～24日の日程で訪中し、北京では、北京市政府訪問や日本大使館に於ける両国の生徒の交流歓迎会そして文化体験などを行いました。

学校交流では、筑波大附属の生徒は、北京市と天津市に分かれ、北京では北京師範大附属第二高校他3校と、天津市では第二十高校と交流しました。そしてホームステイと、それぞれの場で歓迎を受け、互いの友情を誓いあいました。



北京市政府で安鋼副秘書長の歓迎の挨拶を受ける

中国の家庭で「高校生未来宣言」を交換



アメリカからの講師招聘による TEACCH自閉症研修会（報告）

附属久里浜特別支援学校 副校長

雷坂 浩之

本校では、これまでも2名程度の教員が海外に視察や交流に出向き、その成果を他の教員と共有する実践等を積み重ねてきました。

しかし、一度により多くの教員が、有益で日々の実践の参考となる海外のプログラムや指導法等を学ぶ機会の設定を再考した結果、本年度は海外から直接講師を招聘する形で研修会を実施することとしました。

今回は、自閉症教育のメッカと言われる、アメリカ・ノースカロライナ州ウィルミントンにあるTEACCHセンターから、センター長他2名の教育心理士をお呼びし、自閉症幼児の指導のための研修プログラム「Ready,set,go」を本校向けにアレンジしてもらい、教職員悉皆で4日間（平成25年2月22日～25日）にわたる研修を行いました。

本研修では、講義、教材作り等のワークショップ、講師による模擬授業などを通じて、以下の内容を学習しました。

- (1) 幼児期の自閉症の学習特性の理解を深め、一人一人に応じた学習環境の設定仕方。
- (2) アセスメントの方法、アセスメントから教材作成までの過程の分析方法。
- (3) 指導者と子どもとのやりとりの場面を観察し、子どもに合った言葉の掛け方や関わり方などの指導方法。
- (4) 実習を通して、更に子どもの実態や指導内容に合った教材の作成方法。
- (5) 本校で実践している1対1の指導（個別課題）や自立課題の取組、ワークシステムなどについて基礎となる理論。



教材作成のワークショップ

今回の講師招聘型研修は、教員を海外に派遣するよりも研修にかかる費用対効果が高く、最新の指導法等を一度に全教職員が学べるという点では、大変効率的な研修となりました。また、参加した教職員からは、「日頃の自分たちの実践を振り返り、これまでの指導法などの見直しができた」「今後の実践に生かす材料やヒントを沢山いただいた」

など、概ね好評な感想が寄せられました。



研修に参加したスタッフ・教職員での記念撮影

筑坂生になる第一歩ーコミュニケーション・キャンプIN黒姫ー

附属坂戸高等学校 教諭 塗田佳枝

附属坂戸高等学校の1年次生は、入学式の翌日から長野県の黒姫高原で3泊4日の校外学習を行います。この「コミュニケーション・キャンプ」は、①新

しく知り合った仲間との友情を培う、②総合学科における学習姿勢について学ぶ、③人と環境が調和して生きることの大切さを考えるという3点を目的とした1999年から続く新入生の恒例行事です。クラスを横断した10名の班単位でインストラクターとともに活動するのが特徴で、初日のアイスブレイクの後、2・3日目は野尻湖を一周するマウンテンバイク、まだ雪の残る中で行う森散策に取り組みます。夜は「産業社会と人間」の講義やクラス単位のレクリエーション、最終日には昼食作りなどがあり、4日間を通して仲間とコミュニケーションをはかり、本校で学ぶ土台を作るプログラムが設定されています。

今年は4日間のキャンプのテーマを「出会い」とし、初日の夜に「黒姫高原を感じる・知る」という課題を発表して2・3日目のバイク、森散策で意識的に取り組ませました。

さらに新しい試みとして、3日目の夜はキャンドルの灯りを頼りに班ごとにキャンプを振り返り、最終日には活動中の「出会い」を写した1枚の写真を使って発表会を行いました。高校入学後はじめての発表でしたが、マウンテンバイクの途中で地元の方々にインタビューした内容や、動物の足跡や雪解け水、森の空気など自然の中での発見を、各班とも堂々と伝えていました。「このキャンプを終えてようやく筑坂生になることができる」という閉講式での言葉を真剣な表情で聞いていた生徒たちが、これからの3年間でどのように成長するか楽しみです。



キャンプを振り返る



「出会い」発表会

専攻科造形芸術科 平成24年度卒展

筑波大学附属聴覚特別支援学校 高等部主事 橋本時浩

附属聴覚特別支援学校高等部専攻科の造形芸術科では、2年間の課程の学習成果を発表することを目的として、毎年「卒展(卒業制作展)」を行っています。平成2年から始まったこの取り組みも23回目を迎え、今年も1月18日から3日間、市川市文化会館で開催されました。地域の行事としてもすっかり定着し、市川市の市民をはじめ大勢の方にご来場いただくことができました。

造形芸術科修了生7名による、油彩画、ビジュアル・プロダクトデザイン作品、染織など、様々な技法で制作された力作およそ100点で市川文化会館の大展示室が埋め尽くされました。展示は各種展覧会の入選・受賞作品や、「卒展」のために制作された作品で構成されており、まさに2年間

の集大成と言えます。中には縦130cm×横160cm(油彩画の規格では100号)の大作もあり大変見応えのある内容になりました。

この卒展を開催するにあたり、生徒たちは何ヶ月も前から準備に取り

かかります。会期1年前の会場予約にも生徒自身が赴き交渉しますが、

その後、会場レイアウト図面の作成、案内状のデザインと発送、作品目録とキャプションの作成、ポスターの制作と市内の店舗への掲示依頼、展覧会終了時には会場にお越し下さった方へのお礼状の送付まで、一切の仕事を生徒自身が行います。役割分担を決めてそれぞれが責任を持ち、そして協力し合いながら仕事を進めることは、とても有意義な体験・活動になり、就職後、会社という組織の中で仕事をする上で大いに役立ちます。

さらに、受付や作品説明なども全員で協力して行いました。会期中には、大勢の見学者が訪れますが、作品に対する質問にも生徒自らが対応しました。口話や手話、筆談を交えながら、初めてお会いする人に対しても一生懸命コミュニケーションを図ろうとする生徒たちの姿勢に、人間としての大きな成長を感じることができました。社会に巣立つ日を間近に控えた生徒たちにとって、この「卒展」が大きな充実感と自信を得る機会になっていることを嬉しく思いました。



あ〜とで コラボ

～表現することで
つながる～

附属大塚特別支援学校 副校長 高橋 幸子

2011年度より本校では東京芸術大学の「障害とアーツ」の催しに参加しています。昨年12月のプレコンサートでは、小学部児童が邦楽専攻の学生さんと日舞を披露しました。5月に打ち合わせを開始し、9月以降協議しながら練習を重ねました。正座をして丁寧に挨拶をするのも、浴衣を着て足袋をはくのも初めて。でも、この取り組みを契機に‘和’の身のこなしや所作を学ぶことができました。当日は、憧れの奏楽堂ステージで「さくら」や「元禄花見踊り」を舞いました。枝や布を持つなど大塚ならではの工夫があり、少し緊張しながらもみんながにこやかに演じました。ホールには、芸大の油絵科の学生さんと中高等部生徒の共同制作作品「色舞奏」が展示されました。アクリル板にスタンプで様々な色を塗り重ね、まさに色が舞い踊る作品でした。大塚からは、子どもたちの発達の過程がわかる作品も合わせて展示し、知的障害の理解と啓蒙も図る取り組みとなりました。

年度末には、附属小学校 4年生児童 40名が来校し、本校小学部との「合同音楽」の授業に参加しました。附属小学校とは十数年前より保谷教場での芋掘りなど、交流を続けてきました。今回の授業交流はその積み重ねが結実したといえます。根岸由香教諭オリジナルの曲で、活動に誘われ、歌、ダンス、楽器の演奏、身体表現、鑑賞と、どの子も表現することを楽しみ、夢中になって過ごした80分でした。ことばはいらない、音楽が人と人をつなぐ、それが実感されたひとときでした。



筑駒アカデメイア公開講座

～小学生からお年寄りまで 楽しい学びの一日～

附属駒場高等学校 副校長 濱本 悟志



将棋を楽しむ：小学生もプロ棋士に挑戦



「プラスチック」ってどういう意味？：化学部のお兄さんがやさしく指導



身近なモノから見る世界の歴史：懐かしいな～ 気持ちはすぐに高校生

あっできた！みるみる上達する小学生ジャグラー



附属駒場中・高等学校では毎年、地域住民や地元小学校への社会貢献として「筑駒アカデメイア公開講演会・公開講座」を実施しています。2012年度は4つの公開講演会を実施し、3月23日(土)には教職員・生徒・卒業生・外部

講師が力を合わせて10の公開講座を開催しました。参加者数は252名ですが、付き添いの保護者も合わせると300名を超える方々と楽しい一日を過ごすことができました。

「はじめよう！ジャグリング」ではジャグリング同好会の生徒たちが、「将棋を楽しむ」では将棋部の生徒たちが、『プラスチック』ってどういう意味？』では化学部の生徒たちが講師役を務めました。小学生の素朴な疑問やできたときの目の輝きに接し、本校の生徒は教えることの難しさと楽しさを体験するとともに、「教える」中に自分自身の学びがあることに気づかされていました。

最後に、参加者の喜びの声を伝えます。「おいしそうがおべんとうのキーワードだったのがびっくりした。(小1)」「技ができてうれしかった。筑駒の方たちの演技が楽しかった。(小4)」「発泡スチロールがとけるのを見るのがとても楽しかった。(小4)」「筑駒のお兄ちゃんたちがとてもやさしかったです。(小4)」「日常でさわったことのないシリコンゴムや石こうにふれられるのは貴重な体験でした。(小4)」「本物の裁判もみに行きたいと思った。(小6)」「目隠しをしたスポーツで、人の指示、音を頼りにする自分に驚いた。(大人)」「子ども自身もとても楽しんでいましたし、将棋初心者の方の母親(!)も、将棋の歴史などアカデミックなお話が聞けて感激でした。(大人)」「『今の食事が未来の身体をつくる』という言葉が、とても心に響きました。(大人)」

| 公開講座名 | 対象 | 講師および担当者 |
|-----------------------|------------|---------------|
| 点と線で生物を描く | 社会人 | 本校教諭 |
| 身近なモノから見る世界の歴史 | 社会人 | 元本校教諭 |
| Brush Up Your English | 社会人 | 本校教諭 |
| はじめよう！ジャグリング | 小学生以上 | 本校ジャグリング同好会 |
| 人と人をつなぐブラインドサッカー | 不問 | 特別支援学校教諭・本校教諭 |
| 将棋を楽しむ | 将棋経験者 | プロ棋士・中高将棋部 |
| 筑駒LBC(3・1・2 弁当箱実習) | 小学生と保護者 | 本校教諭・養護教諭 |
| 親子でやってみよう 裁判員裁判 | 小4～6と保護者 | 弁護士・本校教諭 |
| 「プラスチック」ってどういう意味？ | 小4～6(保護者も) | 本校教諭・化学部 |
| 化石のレプリカを作ろう | 小学生(保護者も) | 本校教諭 |

春期研修会

附属学校教育局 教授 熊谷恵子

2月23日の春期研修会には、今年度は、毎日新聞東京本社社会部部長委員の萩尾信也氏をお招きして、「心って何？ 命って何？ 東日本大震災の現場で考えたこと」という演題で講演をお願いした。萩尾氏は、東日本大震災の時に東京にいたが、すぐに東北のつなみで被害にあった現地に行かせてほしいと本社に行って懇願したとのことである。ご自分が小学校3年生から高校2年生まで岩手県釜石市に住んでいたということもあり、おそらくいても立ってもいられなかったであろうと思われる。我々大学・附属学校関係者も東北に足を運んだ人もいたであろうが、それらの人を含めてそれぞれの胸に響いてきたことは大きかったと思われる。また、この後も我々が被災者たちにやるべきことがあるだろうことも見えてきたのではないかと

思われる。

附属学校の演技では、昨年に引き続き、附属桐が丘特別支援学校が引き受けてくださり、小学部1, 2年生の英語劇「ももたろう」が上演された。発声練習からすぐく元気であった上に、本番の劇中でもとても簡潔な英語を使って見事に「ももたろう」を演じていただいた。また、附属駒場中等高等学校のコント部の生徒たちもコントを披露してくれた。先に行われた「ももたろう」も、コントの中にすぐに「peach boy」という言葉で取り入れたり、その他の研究発表の内容から聞こえてくる言葉もよく聞いて、それらからも中味を工夫してくれたようであった。その即興的な対応能力にもすごくびっくりした上に、とても楽しいコントであった。

附属学校研究発表会

附属学校教育局 准教授 菅野和恵

本発表会は、「学校教育改革としての3拠点活動のさらなる発展に向けて～筑波大学附属学校からの発信～」をテーマに、2月23日(土)に行われた。まず、「先導的教育拠点研究」事業から、①プロジェクト1学校で「気になるこどもの支援」に関する研究(熊谷恵子・安部博志・鈴木牧子)、②プロジェクト2子どものコミュニケーション能力を育てる(菅野和恵・荘司隆一)、③「先導的教育拠点」としての附属学校図書館の整備(澤田英輔)の3発表が行われた。続く休憩・ポスターセッション・附属駒場高等学校生徒による演技「コント」の後、「教師教育拠点研究」

事業から、①教員免許更新講習(松本末男)の1発表、「国際教育拠点研究」事業から、①総合学科だからできる! 附属坂戸高の国際教育・ESD(工藤泰三)、②筑波大学オリンピック教育プラットフォームから一体育理論におけるオリンピックの教材化(長岡樹)の2発表がなされた。それぞれの拠点事業の報告により、大学と附属学校の連携に基づいた取り組みを深く理解することができた。また、附属駒場高等学校生徒の演技コントは観客の大爆笑を誘い、附属学校生徒の生き生きとした姿を見ることができ、大変充実した研究発表会であった。

平成25年度 附属学校研究発表会日程表

※各附属学校が会場となります。
(附属学校研究発表会を除く)

附属学校教育局と各附属学校合同での研究発表会を下記日程で開催する予定です。ぜひご参加ください。

| 区 分 | 研究協議会等 開催予定日 | 区 分 | 研究協議会等 開催予定日 |
|---------------------|--|-------------|---|
| 附属小学校 | 研究発表会 平成25年6月14日(金)・15日(土) 初等教育研修会 平成26年2月13日(木)・14日(金) | 附属聴覚特別支援学校 | 関東地区聾教育研究会「聾教育実践研修会」 平成25年6月13日(木)・14日(金) 聴覚障害教育担当教員講習会(文部科学省、筑波大学共催) 平成25年11月20日(水)～22日(金) 聴覚障害早期教育公開研修会(特別支援教育研究センター後援) 平成26年2月(予定) 筑波大学連携研究報告会(学系と附属聴覚特別支援学校) 平成26年3月(予定) |
| 附属中学校 | 研究協議会 平成25年11月9日(土) | 附属大塚特別支援学校 | 研究協議会 平成26年2月14日(金) |
| 附属高等学校 | 教育研究大会 平成25年12月7日(土) | 附属桐が丘特別支援学校 | 自立活動実践セミナー 平成25年7月31日(水)～8月2日(金) 実践研究協議会 平成26年2月6日(木)・7日(金) |
| 附属駒場中学校 附属駒場高等学校 | 教育研究会 平成25年11月23日(土) | 附属久里浜特別支援学校 | 実践研究協議会 平成26年2月6日(木)・7日(金) |
| 附属坂戸高等学校 | 総合学科研究大会 平成26年2月20日(木)・21日(金) | 附属学校研究発表会 | 平成26年2月22日(土)(会場:東京キャンパス文京校舎) |
| 附属視覚特別支援学校 | 研究協議会 平成26年2月15日(土) | | |



第8回「科学の芽」賞

筑波大学開学40+101周年記念事業

朝永振一郎記念

40+101

第8回

「科学の芽」賞 募集

主催……筑波大学

協賛……毎日新聞社、時事通信社、日本教育新聞社、日本物理学会、日本物理教育学会、日本科学教育学会、日本理科教育学会、日本地質学会、日本生物教育学会、日本化学会、日本地学教育学会、日本初等理科教育研究会、文部科学省

募集期間

2013

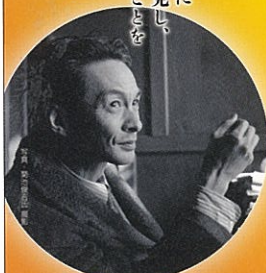
8月20日(火)

9月30日(月)

【消印有効】

作品募集

朝永先生の言葉のように
自然現象の不思議を発見し、
観察・実験して考えたことを
まとめましょう。
素直な疑問・発見が
あるものを募集します。



1906年 東京に生まれる
1941年 東京文理科大学(現・筑波大学)教授
1948年 文部省顧問、東京理科大学学長
1949年 東京理科大学(現・筑波大学)教授
1956年 1957年 東京理科大学学長
1963年 ノーベル物理学賞受賞
1969年 筑波大学名誉教授
1979年 逝去



筑波大学
University of Tsukuba

お問い合わせ先

03-3942-6806

筑波大学「科学の芽」賞実行委員会(学校支援課) E-mail: kagakunome@un.tsukuba.ac.jp
詳しくは、筑波大学ホームページ(科学の芽)を参照 <http://www.tsukuba.ac.jp/community/kagakunome/index.html>



朝永振一郎
「科学の芽」賞実行委員会

■提出方法

レポート用紙(A4判) 10枚以内
※応募作品は原則として返却しません。

■応募資格

小学校3学年～中学校、高等学校(高等専門学校3年次までを含む)、中等教育学校、特別支援学校の個人もしくは団体 ※小学生部門、中学生部門、高校生部門に分けて公募します。

■審査方法

筑波大学教員、筑波大学附属学校教員及び後援団体関係者などが審査・選考

■審査結果発表

平成25年11月下旬、筑波大学ホームページに掲載

※受賞者本人には別途通知します。

受賞作品は筑波大学のHPに公開します。

■賞・記念品

「科学の芽」賞の受賞者には学長より賞状と記念品を贈呈(その他、奨励賞・努力賞があります)

※応募者全員に記念品を贈呈します。

■表彰式・発表会

平成25年12月21日(土) 於・筑波大学大会館

■送付先/〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1
筑波大学「科学の芽」賞 実行委員会

「科学の芽」賞に輝いた作品集 発行・筑波大学出版会



① <http://www.tsukuba.ac.jp/community/kagakunome/index.html>

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia(後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む)こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア
paulownia

vol.27

発行日……平成25(2013)年5月31日

発行者……附属学校教育局教育長 石隈利紀

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン……スピーチ・バルーン

印刷……広研印刷 使用紙: U-Jlimax [日本製紙]